

## 令和3（2021）年度 第1学期始業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

コロナ禍の状況が、再び一段と厳しさを増してきたことを認めざるを得ない中で、新しい年度が始まりました。春は明るい芽吹きの子節であり、本来はそれぞれが新たな目標を胸に将来の展望に思いを巡らす時期ですが、今年なかなか難しいですね。皆さんはいま、どのようなことを思っているでしょうか。

先だっては、当事者意識を持つことの難しさについて考えてもらいました。他人の痛みを我がこととしてとらえ深く共感することで、例えば大きな災害にみまわれた際にも、互いに助け合って、社会の停滞を最小限に抑えることができるのですが、気づけば傍観者になってしまっているというわけです。

コロナ禍においても同様のことが言えるように思います。私たちは、誰もが抑圧を感じずに日々の生活を送ることはできていないはずであり、その意味では誰もが当事者であるはずでず。何しろ、それは毎日のことであるし、誰もが経験したことのないものでもあり、いつまで続くのかもわからないものであるのですから、一人で抱えるには重すぎると感じるでしょう。誰もがそういった不安を抱いているのですから、たやすく他者と共感しあうことができそうなものです。ところが実際のところは、多くの人が、深いところで共感することができないと感じ、えもいわれぬ孤独感を覚えているような気がします。本来、各人の不安は「個々のもの」であって、抑圧感は一それぞれであるはずなのに、それをともすると表面上の倫理観を声高に語ったり、それに同調したりすることにすり替えてしまう、それは手っ取り早くわかりやすい「共感」を求めるがゆえです。それが「誹謗中傷」として現れるなら、前向きな価値を生むものではないことに気づきやすいのですが、「希望」とか「絆」といった言葉で表現されると、それを否定し、批判することは難しいですね。それでも、本来「個々のもの」である不安感に沿うものでない以上は、傍観者になっていると言わざるを得ません。美辞麗句を用いながら、気づかぬ間に同調圧力に屈し、同じ圧力を他者にもかけてしまっているのかもしれない。

先日の新聞で、あるがんサバイバーの女性による短歌プロジェクトの記事を読み興味を覚えました。

Instagramの「闘病アカウント」に集まった仲間が、互いに励まし合いつつも、その拠り所となるはずの「闘病記」は、生々しくて却って不安になったというのです。他人の体験談は自身のこととして消化されにくい、ということなのではないでしょうか。そんな時に出会った歌人岡野大嗣さんの短歌に惹かれたのだそうです。

「ハムレタスサンドは床に落ちパンとレタスとハムとパンに分かれた」

語りすぎず、余白があり、読者が自由に自分の経験に重ねて解釈することができる点に、感じ入ったといいます。早速彼女は、ネット上で闘病仲間呼びかけ、短歌の会を結成し、歌集の作成を目指しました。その会で、オンラインレッスンを受け持った岡野さんはこう言います。「はじめは『希望』とか『勇気』とか借り物の言葉であふれていた」。そして、「自分の心の動きについて、自分が納得できる単語を選んでみてごらん」とのアドバイスで俄然良くなったのだそうです。「勇気」や「希望」は同じ境遇の人たちへエールを送りたいとカンド言葉であると岡野さんは評価しています。つまり「個々のもの」としての痛みに向き合った言葉ではないということです。一方、自らの思いに沿った言葉を選んで作った作品は、闘病している自分自身を癒やす力を持ち、読者の心を捉えるものでもあったわけです。その作品の一部を紹介しましょう。

「髪のと眉毛と睫毛それぞれとそれと目には見えない鼻毛ください」

「学生のはしゃいで歩く群れにまだ病気知らずのわたしが見える」

「希望」や「勇気」という言葉は、「エールを送る」という正義感を身にまどって、それを正しいとしなければならないという圧力をかけてくるものです。痛みを負った者自身が、その言葉に違和感を持ち、癒やされないものであったとしても、正しい言葉として受け止めなければならない、そんな強い言説になります。表面上優しいイメージをまどっているだけに、この同調圧力には気づきにくく、むしろ強くて抗いつらいものであるだけに、厄介なのかもしれないと思い当たりました。

がんサバイバーといえば、競泳選手の池江璃花子さんがオリンピック出場内定を得たニュースには、私も感動させられました。彼女がインタビューに答えて「努力は報われるんだと思った」と語ったことは、様々に取り沙汰されて、彼女自身も「努力の定義は難しい」との感慨を述べていますが、皆さんはこれについてどんな感想を持ちましたか。

彼女が競技会で優勝したことは、彼女自身が白血病を患ったことと切り離すことができない、いわゆる「個々のこと」であるわけです。ですから、「努力は報われる」と語ったことも、教訓として一般化され得るものではないはずです。逆に、だからこそ、見ている我々も池江選手の「個々のこと」にこまぎれに直面する機会を得て、そこから勇気や元気をもたらしたと感ずるのではないのでしょうか。感動した私も、つい「オリンピックが行われればいい」と思ってしまっただけですが、彼女の「努力は報われる」との言葉が、いわゆる政治的な駆け引きに利用されてしまわぬようにと願うばかりです。

さて、コロナ禍の中であって、昨年度は、例年通りには“できない”あるいは“自粛する”という方向を受け入れざるを得ない社会状況であったわけですが、今年度は、その悔しい思いの中から学んだことや気づいたことに基づいて、学びの活動を“実施する”のだという基本姿勢をもって臨まねばならないと思っています。本日午後には、澁漕とした新入生 240 名を迎えるわけですが、新たな学友たちとともにアクティブな方向を探ることは、何と愉快なことでしょう。直近の大きなものでは、体育祭や林間学校などの行事が挙げられますが、普段の授業や部活動においても同様のことが言えるのであって、その実現のためには、当事者としての君たちの積極的な関わりが不可欠です。もちろん、そこでは、「借り物の言葉」で正義感を振りかざすことなく、「個々のこと」にこまぎれに直面したときに語られる言葉をもって、それぞれに、またお互いに考え抜いていきたいものだと思います。

それこそ、この駒場東邦で学ぶ者としての真価が問われるときだと考えます。充実の一年にしてまいりましょう。期待しています。

以上をもって、式辞といたします。

令和3(2021)年 4月8日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦